

一〇二

北越奇談

一



花を植ふ園を蝶阿し多ふまひ水邊に
 池に螢夜照るれそら好水を慕ひて
 予書を讀み終日倦むに書肆の訪こと
 屢一日水書堂主人青江一帙を携
 まる標題と北越奇談と予朗誦して
 曰夫幕こそよもの他乃國は名勝立跡なり
 其れをすてに文ありて夫れを記し書りて

北越卷之一

ロ八一

宛然として北越ふるはるごとく盡速に上峰
 かさぶや書肆笑て我既に其心ゆれと進
 編者崑崙先生々遙く北越三条にあり
 削刷ぬつてのち先生は校合を待む發兌の
 期を錯る子に其吏を諾さん為業たり
 とて去書肆乃言黙止るく備書刷人の徳
 を補ふと人我唯倍書り遊ぶ乃が家

書を校合まじりあはせふとまきまきまきまきまきまきま先生せんせいの意いに
 悖ひらくことことはは稿本こうほんをを得える
 所ところはは先生せんせい乃なり閱みまははるるをを得える
 發はつ販はんふふままししるるよよままししるるをを安やすししむむ

文化八年辛未蘭秋

柳亭主人種彦



北越卷之一

ロ二

北越奇談目錄

- 越後地理略程畧圖並順路案内
- 龍蛇ノ奇 卷一
- 七奇ノ辨 卷二
- 玉石 卷三
- 怪談 卷四
- 同 卷五
- 人物 卷六

右前編六冊

北越奇談敘

維昔吾北越國俗相傳為口實者有七奇談焉。甫後民間妄好怪僻，雷同其說，塗之增附。暨今至其既有二十有四奇事云。於是乎愚者動眩惑于其偽，妄贖無適從矣。吾橘先生詳論辨七奇輯錄其說，撰題北越奇談者，若于卷博而約簡而要天下，始知七奇之說且許其實也。昔司馬遷將為史記，歷觀天下紀載亦勤矣。故及書成人服其談博也。先生所

北越卷之一

四二下

善画所好詩既老無事血氣益彊固周游海內蓋為是也。冊之美且善也。衆目所視誰敢間之及刻成命敘於余遂書詹之言以為序。文化六年己巳初冬。

明浦漁人林成



凡諸國遊歴の客名所古跡を探んとするの志ある人の必だまづ其國の地理を知らざらんば其國の道路の順逆に於て空しく草鞋を費すとのことありとぞわづか
 数十歩の遠に名勝をんかしく残情の止めかきまめなりまればおて
 今北越二三の勝野とわけて凡遊の子にならうとするのあり

○市振 親あゝむと云 銅浦 釜山崎石むら 居尋 親寧丈 五智 四分寺

○今町 直江の津妻舟田の 関川 高田 榊原候十五万石市城下江町今めいげの橋

○春日林泉寺 上杉輝虎公 柿崎 澤上入跡守下り 本山下通 上寺輪 鐵

産 島 青海川 一が橋 鯨波 密子洞 柏崎 足る

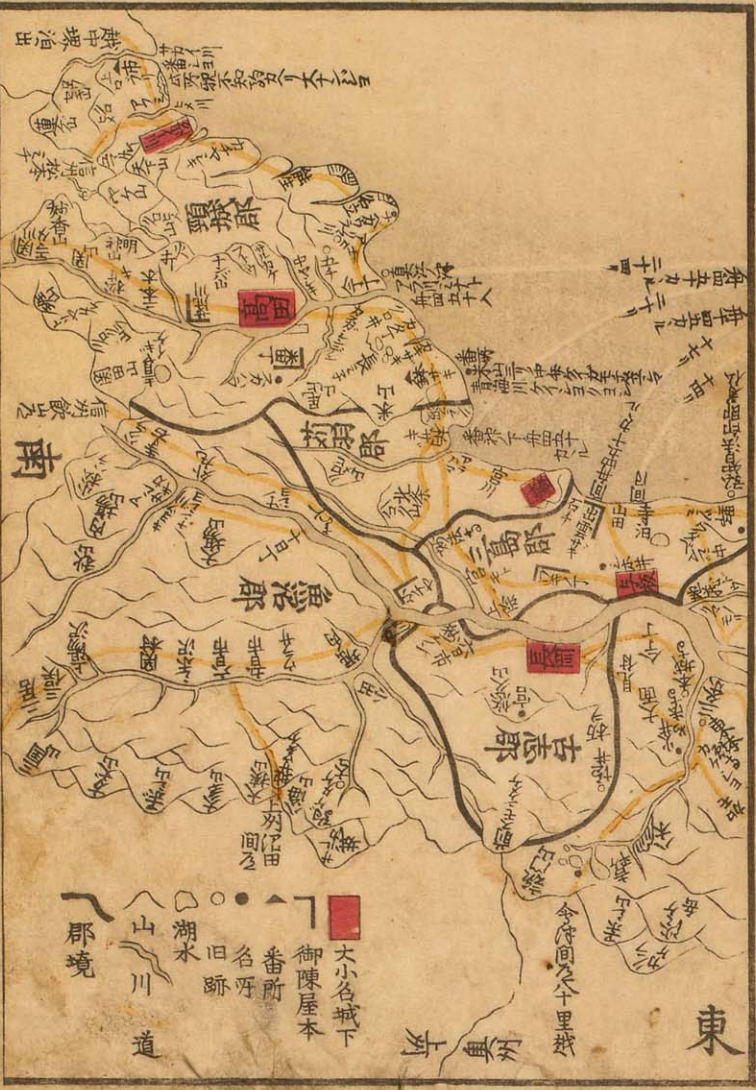
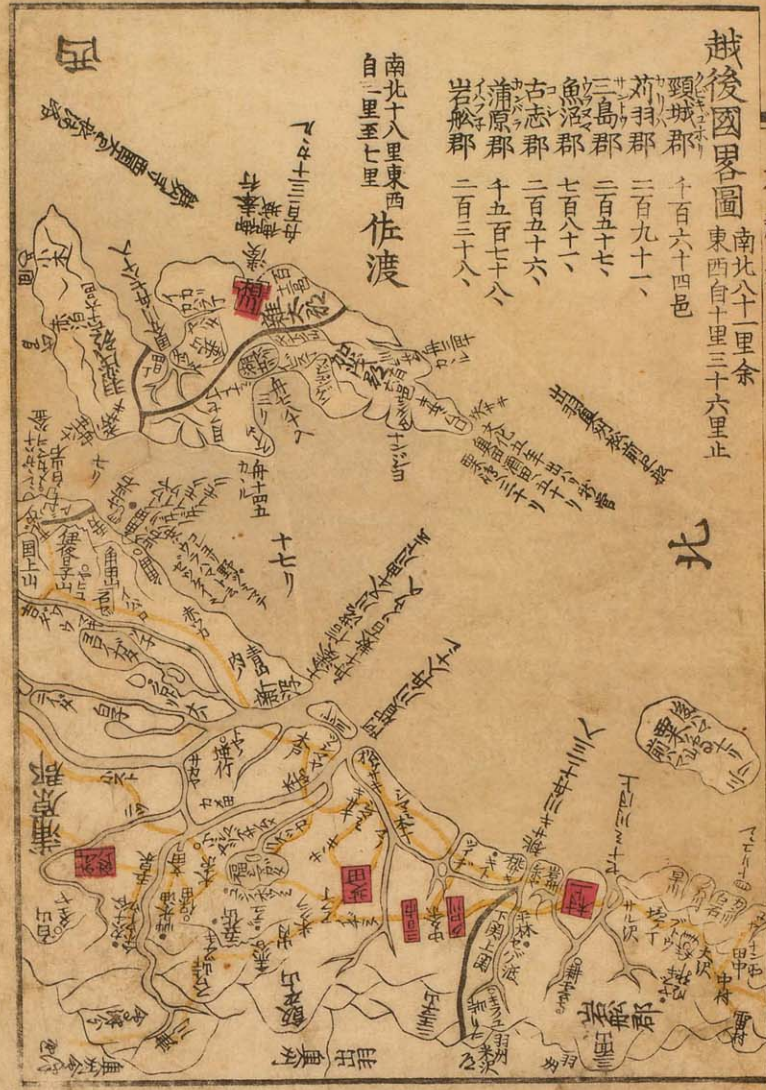
長岡 まげに生 長岡 まげに生 牧野候七方四万石市城下 徳友山の宮 十八丁

越後國畧圖

南北六十一里余
東西百十里三十六里止

- 頸城郡 一百六十四邑
- 羽羽郡 二百九十一
- 三島郡 二百五十七
- 魚沼郡 七百八十一
- 古志郡 二百五十六
- 蒲原郡 十五百七十八
- 岩手郡 二百二十八

南北十八里東西 佐渡
自二里至七里



大小名城下
御陳屋本
番所
谷所
旧跡
湖水
山川
道
郡境

入方村いりかたむら 少井七奇すけいしちき
 如法寺村にっぽうじむら 三糸さんいと 二糸ふたいと 東本願寺掛野とうほんがんじかけの

弥彦やひこ 一宮いちのみや 四上山よつやま 二戸丸ふたどまる
 野孫のそ 智法ちほう 下即刃したすげ

仏ぶつ 角田濱かくたはま 池いけ 赤塚あかつら 下した

新浮しんうき 湊入みないり 丹景色にじき 下した 名屋野なやの

小島こじま 八房梅はちぶさめ 草水くさみづ 油あぶら 河内谷かうちや

無後塔むごた 五泉ごせん 山やま 三さん

水原みづはら 福島ふくしま 三さん

新發田しんはつた 津口候つぐきこう 五万石ごまんごし 城下じょうげ せいのうせいのう

乙村おつむら 大日堂たいにちどう 村上むらかみ 内藤候うちだう 城下じょうげ

蒲萄峠ぶどうとうげ 蒲萄ぶどう 矢野やの 羽州はつしゅう

○右大略道路少の遲速ありとんども皆順路なり

前の圖まえのず とひまのあらしをさるるべし

凡例

一 怪談の君子の憎む所なりとと近世の風俗文事をあつていふ

聖語に童牧の口號より仏説いともいふ婦女の古妻ともいふあり

わけて朋友の茶話對實乃浮笑動もれ其顔をまへんととも嗚呼我

等乃下愚然して退くも無中なるか怪談妄説と時あり

又一助なきことありんやと世に戯作とありとも此素意あり

人の中にもふとふとあり

一 奇事怪説人の記家々に論ども所數十百章に至れば予が月れあり

月夜なるもの六十にして二取て三寫れわやまの無に色あり

一年歴日時とありんや人乃姓名をかくせるあり亦地名を出さざ

北越雪中之圖



葛師北齋畫



其久を記せむとわり異は今時存命乃久又四事と久と其子孫顕然する
はよれと憐むのミ

一 東に安流れとをほへ予が乳字性愚乃いこと所之亦國字天示遠波の相遠乃
くく希くの性達乃諸子言くは唯黄を加身んことを請わす已

文化八年辛未仲秋

杜越三糸 崑崙橋 茂世述



画に北斎翁の筆かたは画翁の筆多をよとげんと崑崙子のあき繪乃
まに彫ももは四殺かたはに茂世の印をわくより印かきこい
悉く北斎翁の画なり

辛未秋

柳亭梓辰再稟

北越奇談卷之一

北越 崑崙橋 茂世述
東都 柳亭 種彦 投合

龍蛇ノ奇

北越ハ水國なり西北海廣く東南坤ハ隈あり山勢峻峭
のどく聳て其央只香山茶岳と置つてこれ一と余地あり
平田邑里雜坎八十餘里に連り横幅屯地の厚薄二從ぐ
或八十或ハ二十乃至三十餘里止て川脈縱横一池沢必星
就中湛水の大方ありの鑑湖と名づく圓り十有餘里四時天
に瀾漫あり商客つねに揚帆して兼往と蚌珠斐暗と南溪

北越卷之一

が東遊記のあがら伏りて畧之福湖次々圓り九里のあまう
冬夏水尚不増減蓮花如錦漁舟織かむく謂ゆる青蓮の
生どり所なり塩津深はもく項只一片の砂岸と穿つく
教里の酒水一時に滯海一今己に六十餘村あり佐浮ハ山岡
にありて其境狭けれど水甚清麗にして大鮓魚を生む
大浮田浮九浮蓮浮浦浮徳人浮揚枝浮岩関浮岩松浮
沼畜浮鳥屋野浮園浄寺の浮總て蒲原郡に考くありて
鱧魚の美かり秋風に感する一蓴菜の各塩ハ己より人の
好對ハ入る長峯の古城跡とめぐり湖水分のあり其清徹
いふありなり爰に鯉魚鱧と産して北國ハ又珍しき所也

頸城郡の中長池青柳の池あり山の半にして清冷明徹はこ
つてくさるゝはあゝど謂ゆる隋龍のくくもとて一人諾を
てくくもれは忽水涌浪とて近付べしとて一夜又もりの悲
怖をくくもつてくくも上出の池鏡ヶ池蒲生ヶ池皆次之又五十嵐
川の原流蕨門山の中嶺一誦門ヶ嶽吉ヶ平とてくくも野七り乃
池水あり其大なるもの馬追ヶ池と称ど古本齋くと覆ひ山
向に巡りて清徹鏡のどく一点の莖穢わくくもる人寒慄せざる
かゝ異郷の客到ま即雲起り風とて雷雨とまれ心底
白螺と生じて一奇とて烟中早とる時ハ行者とくくもくくも山に
登りかの白螺とてくくも来ま即大雨を田間山とてくくも後速ま

北越巻之一

其野にわたり返とてくくも若誤て螺死とるくくも洪山の
とて大池鱒ヶ池河高ヶ池亦の皆次之河山なるに應信川其
原甲飛信の三州より出く即千曲川あり魚沼川一々大野川
とてくくも万山の諸流もくくも是の合り城に千里の長流とてくくも
春秋冬夏のつゞくくも森殿西岸を侵せり其幅丹より
て抜岡のめれども木板より三条の間にくくもてくくも千数百間の
とてくくも野教里よりそれより三川よりくくもくくもくくもくくも
新沼より沼寄の裏備漕一里のめまりて水涯とてくくも海漫
海潮の八舎とる野より是より呵水はくくもくくも通船の新渠
あり二里の阿茶店お連る阿賀川とてくくも其源日光山より

出く奥州を歴余津山中の後流ひとらぬめりまりて信川に
 沖くぬ大江なり海をらくひりてふ松ヶ崎にけりて所千二百
 間とて堺川姫川へ國の南にありて五双の急流なり青海川
 布川古川股川大和川早川荒川保倉川近江川鴉川鹿田
 川朝目川小谷川東川島修川三島川宮本川清津川赤川
 中津川文野川佐梨川阿古百川丈口川刈谷田川貝喰川
 五十嵐川天神川加茂川古阿賀早出川多屋野川加信川
 姫田川乙川黒川絶名川荒川清川湫波川大川はる其外
 分流後流丈小の流水あびくひづる誠は北越へ天下五双
 の水國とてべりかるとゆくに龍蛇の化を量にして海より出く

北越巻之一

山に入山より春つて湖山に入山は巻き雲を起し不時の凡雨を
 ちとて年とて人の死る所なり予児る時より是を夢ていふ
 又とてかの葉公の龍を好める論に異なりれども人のお訪るよ
 付く不審するもいふおれなりしが去ル寛政五癸丑年十一月
 廿日さりがさき私用出来りて独蓑笠に寒風とてその新雪の
 津にいへんとては日殊に雪をびくふりて行ぬ人もあ
 ぶしが本傍なる茶店に立寄便形やあると尋ねおむるに
 かりふ雨雪とておのづかふもつて小舟ひとら旅まらせ
 く漕舟りぬ待りへけりておれは幸ひと便とりて舟中
 に簑をらちまきて坐るとおれをて忽阿賀の丈江と接きり

けり新渠あらたなのいづろく茶店ちやてんを望のぞみぬ日あひの風雪かぜゆきをひくま
 りどに春往はるむきの小船こぶね數十艘岸かたにつまぎて行くいまに舟ふねもどく
 もあつざりけむふね舟子の日旅ひよ人今あぢ寒気かんまをあらび
 移うつひとく又一里またいりをかり漕行そうぎやうぬ時ときつまご七ッななのゆるさざれども
 飛とつゆめりあつ雪空ゆきあか中ちゆうにひるかた遠景えんけい總そうて暮くれがどく
 代野しろのり野のりが名なをな一いつつあり新深あたらふかつ一里いりなり名なにわ入い
 八千余流やちせんごの港湊かうみなととも野海のうみと河水かみづと只ただ一片いっぺんの汝岸にがしを隔へつる
 のくち浪天なみあまに漲あふえり人ひといとおとぎおりうれがま
 舟底ふねぞこに打卧うちふ居ゐけるに舟子ふねこ忽たち声こゑをあげあつて強こゝろきう
 くらや龍巻りゆうまきの来きるらんらん舟底ふねぞこにまろひ卧ふぬ予よもろひう

編者崑崙
新澤に
龍卷よ
ふ



さらさられが急ぎ上りて是をみるに海上岸近く一陳乃
つとまらぬ
 黒雲伏来その疾より矢のどく勢ひ浪と捲破とをせ其
つとまらぬ
 のぞんぐ突来るコハかるべしとわれも舟中に時び入るが
つとまらぬ
 せとよは勢ひ舟にのこるべからざる道めりんやつとよ
つとまらぬ
 竜蛇の白刃をわらりととりてそのがれぬ命あふと又
つとまらぬ
 舟底よりまのぎり刀ぬきとるべしと額にわく舟乃猛よ
つとまらぬ
 片坐とりてどまそわれ其間三回をかりめりんうたの方
つとまらぬ
 をとる勢ひ雲百端をまうに似る風一條にづと説と奴
つとまらぬ
 のどく川浪忽ニハにさけく舟己よりらがらんとせが横さよ
つとまらぬ
 に吹来と石老砾と抛に似るおびんと半丁をかり退けらる

予そのつね毫と画くどに其真を見ざるは恨と有らう
論ざる所其説後くは憂るわやうれはみとらうととも
さうとわがう公と付く雲中をえれども又の其形入る
ど只雲中うぶめは其頭とわがうき呼吸のどく火光
わい一凡と共に後より打つびくと一息く一う里雲とるん
其丈徳て十丈はんとさうさうぐ其雷のどく巽とさう
行る野木をぬき枝と刺左右に吹花をわうさう凡の本の
まの乱るにさうさうどわがう小一瞬のる夢のどくいさぐ
ゆる又一奇うらひは日新深にぼりゆどく野守が刺に候
ゆる本穀大根うんど積る小舟十一艘は怪凡のゆる野僅るに

北越巻之一

二艘繩引にさう水面をさうふ吹放されり残る九ツの舟は少
一も動ぜどゆさういさう岸にあり其疾とせば舟子向く
舟底よりさめがりの野守が刺に候うせふと笑に命を全
一の咎をに宿法て入れば先をて十一人の舟子皆舟
予と介抱ゆさぬ其疾はぐるる一同に家内六人の客十
三人う各枕を打交て卧とんども予はかるとのゆさうさ
さるに寒風肌を穿つて夢むとさうさう際さうお咳けれ
はあらの孫笑止にやかりひけん故て起しう外面に出葉松
多く折葉う床下の查左右にたつ其申の枕をさうさう

上にも早く封覆ひけしへ忽ち風口も北暖つるころへ
かの錦繡の夜のものはもやろやろとあそそけける
世の生涯はらゆる奇りゆもめひゆるりのうら
北北越海をこの人家に上屋上の隙を立田間へ龍巻を
節必も百姓大勢めらまりもゆるの蹴蹴さんどやうも
其怪風とのれ造るとなり

圓龍

寛政三辛亥年八月朔日信川の西江戸巻の傍に
池水ありあつたは日忽西北の風をびくく吹来りて一点の
その水面に落ると見ると百雷一夜の裏に記す黒雲田野に

北越巻之一

ちま二の龍火水上に戦ひ東に追ひ北に返りて
凡車のごとく震電四方よりひくくあきその箒地軸を動ける
忽ち凡左右に吹るれ暴雨盆をかこけ其疾と百千の速
督と放りごとく奉のふとささる氷塊をまら一とび是に
若ん皮肉を破り骨をくぐり烈凡のころ野家を傾け本
と穿ら石状けし土を覆ると急雨のころ野登と通し戸を倒
平地忽江河をせり一龍の赤状ささる稲麻をらさる
村屋を乱し栗林とくる村下をささ加茂の山を添へ
電る一龍の信川とより三條の町端とささ堤の上なる土巻
と押茶店を倒し南とよりて去去りしが又半空より川返り

山の方を北に巡り行くとも至る所は皆山に隠れし所なり
村落田野大小あり人家草木に害ふまめし殊に甚
しき信川の多し栗林の前後にして其余二三里に在るは
のち予は此の地帯にありて其日ハ殊に八朔の夜
ゆるりしに田家の祝宴ありゆるりて翌日早天如茂の近村
より巻御到来して其變り成所より見命をかる所
龍の丈斐ハ北越にも稀なり

巻水

門年八月十三日朝吾時新保と出船し池端の幽荘に泊り
んとて侍人者一人乗せられ後舟一丁ぶかり下りて来るぬ

北越巻之一

予が乗合の湯殿山請尾州の石者十八人あり殊に晴天一片
の雲なく風もなしく小黒色のみなるは凄然と難く打返り
沿考の裏深より新渠一里ぶかり舟子の強もひて急ぎ
けるが忽海上に下むれぬ雲起り瞬の中は半天に掩ひ数條
の雲皮下り已に波上五六間にもなりぬと是れゆり以てきりひ
す尾梢に忽白波さく湧上りき尾に接ると又一が一條の
白氣里中の中は立のちと數十丈なり巻あげしる水も
半より断く落ぬ海上に波浪りき窪らかる窟をせせり
かごとく白氣中へ入るとひとくく驟雨庵を待つるがごとく
咫尺の間もなすべとそ船中忽水のふれさきとす 巻を成り



聖敬寺乃園中
 小地風雨を
 記す
 登天を



けりて一條の白蛇と突て登るまれば十三條央下り
 くるまゝ十三庵の水を巻ひらわらば水中の龍とづか
 りて
 雲はふはひりて引連教條のまはあはすととそま
 りて
 けりてまはる一点のまをとりびく後七匹の化を
 まらんと只ま中
 の龍は成りぬる前まらづいしてあづまされま
 り又龍乃
 脱ゆま追て知者の論成りせん

登蛇

頸城郡松の山村聖敬寺とつらふ森とく古木昼暗く
 庫裏の丈尺に臨み清水潭とて夜鳴くあり一とを杖の
 もと老僧客とお對し問答止くまらざりて黙坐するあり

沢のほとりへ小蛇の長五寸ばかりつらふ這生く石上の登り
 其尾がぐらに四五寸ばかり石に付けく直まゝ一声をそく吟
 ぶ客のやゝ々々同僧の曰はれ正しく登天の蛇うらぐ曲
 断まうゝどそ人とゆび丁おきんど糸納よ窓下で茶の
 谷覆ひさぐらの中一点の奇雲蒼頭にのれ小蛇忽ち
 又へどかふる不どとそめ暴風もさまじく吹起り樹を
 倒し山を動しく蛟龍雲中の現に西に表東に地北に翻り
 南にかけやく飛横もしく数十度丈雨いしくつら石は穿
 ら山を割く洪水沢にのれ暗きと周夜にとうどおの
 五つり暮の七りに至るもぞ戸を閉く閉くとのふど只今

北越巻之一

天傾き地漏うとこそしさどいふかりは去るに忽ち中
 一歩の筈あうく山林動揺しゆるが凡兩程き晴りりさ
 けくともう其去りし所をさくど然るに二三をえどつて
 初更の以本と刈者深山に入大蛇枯骨数まうけりて
 けり予尾と按ざるに登天の蛇人の看に觸るる言ふ天帝
 のれと罰ととらりり是ホのとけりるあうんう只しは説
 も又信どぶまはれもめりど

其二

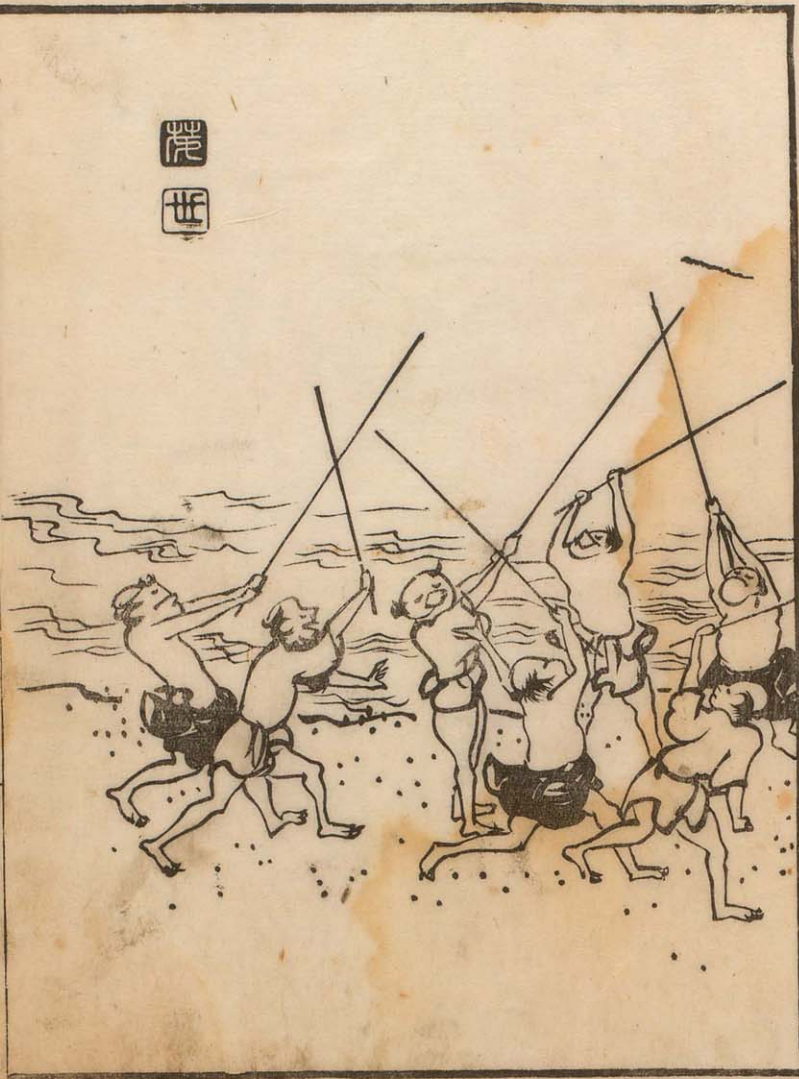
二条の古城跡今うけ残まうりのふに堰はと埋れしきども
 泥ゆる水はくくまうく開か長く人家建まうとさぐり年秋

もやがれの声のそとまにの荊の糸のうらり又かりかるまる蛇
 一のわらりままの糸の糸の登るらの其の尾をうらり少かれまる乃
 先に打まとひ頭をく仰では杖用まえと豆やどうるを
 吐けるか忽ち鞠のまま怪雲となりてかの小蛇とわく煙の
 下に中空にま登る程とめれ又雲俄にうづまま紀の暴風
 樹上を押し上るの成つま暮るもさらにかさざりじがめ乃
 登蛇のこらるに北とさうて表をうらぬと是へれど夜に入りては
 つらく雷電をうらしま二日のうららむ於風雨止まりけり凡是
 其の類とると甚まく皆目のめらる人の見る所にくこうとさ
 疑はさまにのめらねども予ハのうらむ登蛇と見む

西川乃虫人
棒をもち
怪物と
いふとある



北越
世



似類

信川の方流西川とくもへ海に近く伊夜口子山の一里東と巡
 王新深乃南平岳岳はく舎を以川つゞきの首根とくる呀
 又鈴本村とくるは西村川を挿てあり夏の夕暮若者ども
 弓くめつまり流に登り砂汀に執れのそと打ふゆゆたまりとど
 二尺めまりりるりのか中一丈をあり上にありてままりりれ下
 ひらかると兵術に持とつかとく一時とれ箸ありてまと
 尺定びますりあらむととらめら小児木釣竿小竹きんどりら
 来アくく是を打んととれはもと又に打めつるとは若き者は
 奥に入らぬに柱を挿きんとは摺ひまつて左右前後り是を

打てども其ひるがづると速いそ一口も打つたところの
次才に又勢東西の岸にあらまう春う力と暮一声とどけは
ておやぐにゆ時とち怪おのほろく西村の老若あどら
ちどぞ登初とるとあびさく旧も己の暮とるとわどに凡る
俄に水陽より起りそのさけしきと皮肉を被ふかどく樹に
とて皆く家に逐ぬけけ一り殊に奇うう按どるに是も
も又登蛇のたぐひやうんう

卷水一奇

中ノ口川とつるも信川の外流にそ西川より其幅とと
えうり此流に付く吉井村のわらう千野ぼくとつるうづらう

北越巻之一

酒徳のり尊菜羹かど多く生ど其村に食しき寡女在
て妻夏杖の足とちく業ととては旧小舟に押さう水
面に漂ひけりが晴天俄に一絁の雲かの村中より浮乃上
掩ひ下り水と寒くう晒せる布を引あぐるがじま中
に声のりて舟の櫓と押に異あうど家とん出とまを成
ふんれが空裏一條の白気希暮の尾を曳かどく村のわら
より浮中まどく十余丁にのまう所さく引えうとらや
妻ととる寡女定くは龍にまうれ死せんふびんさよとは
からに呷きどくげけるわとふ忽黒き東の方に引まじが
びわうの凡とちくあまがく時をりくのど然るに五六里

さうして子又雨とどろいて数十里に連うするさうして一とてたゆる
野をくわどくわの寡女舟さうしてせくゆり奉りければ人ぐ
ちらまりつにみまじりかかむや怪我せしとさうさうなむとる
はかの寡女一とて知るとまゝ山面さうに皮風さめ
むとくく謎に龍の神化その奇をかりかこ

河伯

水中の河伯の妻を死する者年毎にありて其説分明
あつて遊遊ともいふともしり其中より以て予が幼年の知人
信川のそつて美越村孝源寺一向宗門にて仍某とて僧
十八才あり者夏の以農家の妻ありて信川に浴し

北越巻之一

くが忽水底に引入りて死すども大に考まのりて露
まてくまづりて考るやどに村中の老若川岸にあり細
と失鍵をさげてさぐりむしれども其のさうにんさるるおも
かく川下半里ふかりて鏡が園とりて野より勇壯の
若者五六人腰の繩を付しよに鏡を山ざりて水底をく
けるが待るすかの亡僧をいささかあげて是を見れば皮層の
百疋付の野のまけとて取門開き後ふとく控満く是を推が
あつてふめきさうとらや飲んた後中にありと家もくくと
まとい打むや切むとやまんど声ぐに喚むぐに其内叔父
老人のつくら正しく毒蛇の抜中のめさうと打むはよりも

ころぬべきぞ肛門とはとん小刀をさう腹上より突殺さんと人
 人一決ちける野母さる者つて悲く借侶の才非常の死といふども
 才奔又及ぬ人業生を伏せしめ似たり只に葬りて身と信
 亦るいざさふ火葬に〜敵とて小焼殺せと入らる瓶に入
 板石を蓋にして其上より火石はく困て焚炭数十俵を以
 燒きさう小忽炎火盛にまのり火勢近付づくものねば今
 へ蛇才も焼失ぬづくさゆる野に忽火中一声の音ありて燭
 炎の中より尺ぶかりかりりの空手にねのびると刃入るか
 ちき氣四野にさら暴風又雨まやたらふづくものいざど山成
 かりせ火氣忽消るせと是と云れば瓶とぞけ火石敷片に

北越巻之一

破を割り謀に龍蛇の神を人智のつとふ野にの〜と刀を
 人ふ〜ひふそれ〜

蝮蛇

葛塚の福湖の西涯に〜今教十邑の惣名より福湖より溜
 水と阿山の中へ吐流せる濁川とよる椽梁あり〜其廣さ二十
 余間あるさるべけとと深き〜我はる〜とけさ〜ど町の端
 大曲とよる瀏殊に涼け野冬の半より爽にさ〜白魚を
 ともも夜どにやひ〜と〜れども漁者三網よりとて又成く
 とあ〜んど四夜に至る者即水底より其網を引ると〜と〜
 破りとも予もけ地の〜〜富〜〜月夜橋頭の是を〜と〜又

とらとら百廿大勢其夜にのりまり登り小石成りて其
劍塚に掘りしはくはく下る所へ忽ち雨一掘りし小石
く松ひまりぬ瑠璃記水仙子有一圓石如卵一日風雨
石忽破小虫出即吞硯中水曳雲上去トアリ公顔るべし

龍力

文化二丙寅六月廿七日未上刻晴天俄に一輪の雲起り
大凡強る白日忽周夜のどくなりしが廿日此圓の船米穀八
百石成りて島尻の沖とともささるが怪奇常ありども凡裏
帆と吹去り舟の進退自由なりども船政揮えぬ繩と引を
凡とる切て沖の方へ送出さんととらるるどい忽四條の黒雲舟

北越巻之一

の前後に曳くらりて波次波に湧き上れば船の老父大まに
おとろき尾へ正しく龍巻の穴所へくさるるべし只に逃
まがさうるべしとて俄に早舟一艘引あらし九人の者ども
つとてくまらつるもひの橋を推すあり十丁もありもるる以
四條の黒雲を打捨てる舟の前後にうづまうるどとそあま百
浪さく湧あがり怪風起るる船成巻て水ぎら四五丈あり
も奥のげまさるるに落しけしおあらしに割碎けく小
底にのるとスレ一が百雷の落るるどく簀竹より龍の南をさ
て宅子よりぬ九人の舟者溺る浦に浮き近付けんば浦
くの人々多く漁舟にうらまうし逆ひきてりてととけぬ

